

平成29年度 出雲高校補習科 入科式

補習科の入科式にあたり、皆さんを激励したいと思います。

今日は新しい一年のスタートの日です。来年の大学入試に向けて、スタートラインに立つ日です。ただ、このスタートラインに立つまでには色々な経緯、思いがあった事と思います。悔し涙を流した上で決断した人もあるでしょう。私自身、通るだろうと思っていた大学に落ちて涙を流し、この出雲高校補習科で一年過ごしたので、その辺の機微は分かるつもりです。

皆さんの中には、浪人生活を人生の挫折のように思って、まだ前向きになれていない人もあるかもしれません。相田みつをの有名な言葉に、「つまずいたっていいじゃないか にんげんだもの」というのがあります。これは、開き直っての言葉ではないですね。人間は、特に君たち若者は、より高みを目指して困難に取り組むからこそつまずく。つまずきのない青春などあり得ない。けれどもそれは、あくまでもつまずきであって、決して「途中でくじけてもうだめになる」という挫折とは違います。

挫折する青春が皆無というわけではありませんが、多くはただつまずきだけであって、つまずいたものは起きあがればいいのです。転んだまま嘆いていることも、投げやりになったりすることもあります。ああ転んだかと思い、痛ければ遠慮なしに痛いと言えればいい。だが起きあがるのは自分の力でなければなりません。そして起きあがってから、ゆっくりと、なぜつまずいたか、どうすればいいかを考えればいいのです。皆さんが、まずはしっかり起き上がって、目標に向かって前向きにスタートラインに立ってくれることが大切です。

3学期の終業式で、1, 2年生に、今年度私が味わった感動の場面を話しました。それは大学入試センター試験前日の、補習科生対象の激励会の際の補習科生の顔つきです。4月の入科式の少々不安そうな顔つきに比べ、一年経つこの日の顔つきには、何とというか突き抜けたような凛々しさを感じました。みんな、背筋をびしっと伸ばしてまっすぐ前を見つめ、落ち着いた姿勢で私の話を聞いていました。その揺るぎない姿に、私は圧倒されるような思いがしました。

そこには、一年間不安や焦りなどと戦いながら、それを乗り越え、これだけやりきったという思いが自信となって表れているように感じました。最後に自分を支えてくれるのは、これだけやったという事実、自信しかないのだと改めて思いました。「艱難汝を玉にす」と言いますが、一年間の艱難が、彼らを玉にしてくれたと感じました。皆さんには、来年の春、「1年間やりきった」という思いを持てるように1年間努力を続けて欲しい。

出雲高校卒業生以外にも、志して本科にやってきてくれた皆さん。良く来てくれました。皆さんが、早くここでの環境に馴染んで、勉強に集中してくれることを願っています。

坂村真民という詩人に、「本気」という詩があります。

本気になると
自分が変わってくる 世界が変わってくる
変わってこなかったら
まだ本気になってない証拠だ

本気な恋 本気な仕事
ああ人間
一度 こいつを つかまんことには

この詩に出てくる「つかむ」について、坂村真民自身、「つかむとは、他を捨てて一つにしぼるということである。だから、これができない限り、いくら本気だ本気だといっても、それは口ばかりで本物にならない。」と解説しています。

自分が本当に目指すものを決定したら、無駄なものを犠牲にして捨てる。目指すものに集中する。そういう「本気度」が必要です。

本気になり、本腰を入れて取り組めば、やがて本物になる はずです。

私は、自分の人生にとって、補習科の1年間は大きな意味を持っていると信じています。1年間を通じ、志望大学に合格することももちろんですが、人間的にも大きく成長してくれることを願っています。頑張ってください。

平成29年4月11日

島根県立出雲高等学校長 飯塚 勝